



古本小引
下



關越る目らる信々山まのちんかうん

雲霧一くれ富土の日はおまら

何某の里とひひるはひ路のまゆけやうと
つら心さる一結まふ莫逆の交ぬく朋友
信らる那一人

涪川やききと富まり一程あり 千里

富士川のききと初よりけうか
桂子かききとほり
此川の早瀬よかけをほり
乃今まの富や桂子と小萩より
秋の風こよ

ちんちん物とやまはんと様う喰物扱く

猪城まく人桂子に秋乃風

いふや母父にいふは
父を母をふくむあ
あは是天より母の性
大井川越る目を路日
西降るれ

秋の目れ雨江戸は桂おん大井は 千里

眼前

道乃への本槿らるれ

二十日 錦ヶ丘月夜 不夜天 山のかまの 園より
るより 鞭をたたく 数里の 遠き 杜牧
早行の 跡を 小松の 中山より 勿く 驚く

馬を 痛く 跡を 見せし 糸の 煙

松葉 風瀑 伊勢より 糸の 煙 十の かり 糸を
きく 糸宮 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙
は 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙
糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙

二十日 錦ヶ丘 不夜天 山のかまの 園より

腰間 一寸 針 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙
珠を 推し 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙
糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙
糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙

草花 不夜天 西の 山より 糸の 煙

糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙
女あ の 名 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙
付 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙 糸の 煙

指の如くおにのさしつるふ山深く白雲峯に
まゝの烟の谷を煙く山勢はあやうく
西よ本を伐る東にひきま院くの鐘乃ち心乃
庭よりふむしよとらふ出入る世は
乃ちふくま詩一ののわしに
唐土の
いふ坊りや

碓氷の山にたつたや坊の妻

西よ人乃ち茶の店乃ち路を奥乃院より右に方二所より

分入げく某人のかよたれとふふをけりて谷
をてそとてふも一彼もくは清水とむし
かりてとて今もそとて

病とくくはるり浮世すたか

ち一是杜葉の伯夷あつてもかたは口をすん若
ちま許申り昔も耳をあつても

山城登り坂をりて秋の自既り斜なるまは名は
取くはるり後醍醐帝此佛陵をぬむ

佛廟年をゆるく志乃ふをを思ゆ

大和より山城を経て近江に入る。長瀬よりなるに
今頃山中をさへくいで常盤木塚あり伊勢の
守武のいひきりとも殿は似る。秋はさきさき
まらふより久んおもはせ

義邦志公のいひよりあはれ風

不破

秋風や数と留念不破の園

大垣よりとまりける夜を本園の家をあへりとも
武苑地を出一時野はくは公の思ひに捨立たれと

死ともぬ旅の果よ秋のくれ
葉名本當寺より

冬牡丹子もよ雪はけしむら

草の花下麻あをてまはげのくた中は瀧のこも
暁や——奥白き中一寸

熱田より訪の社殿大に破き築地をまふまふと
しんたうふかへ糸繩をとりく小社乃流をま
まら石をまもてこそ神と名のるま道一のふ心の
まらも中へ目出度よりまらとゆりたれ

志のゆるく枯く解ふも山に
名護屋に入る道乃ちて風吟も

相向ふも此身も歩も由も似も
草まよふも大も内も一も夜も好

雪見ありあり好く

市人よとて山もふも雪も好

旅人よとて山も

馬城さへかたむも雪も好

海もよとて山も好

海もよとて山も好

足も草鞋も山も好

年れよとて山も

山もよとて山も好

とてよとて山も好

海もよとて山も好

素良よとて山も好

素良よとて山も好

二月事には好

水くやいふは僧乃皆此書

京に坐るもく之井秋風鳴瀧の山家と云ふ

梅林

くめ白く此もや鶴松ぬきと云

梅のふれ花下ありあすこゝれ

伏見西山居寺住僧人下あふく

我衣下ゆれば桃乃雪下せよ

大津とゆもさ山路を越さ

ふはまゝくはあふゆきと云ふ草

湖水船中

辛味乃和を花よりおぼろしく

空の体ひそく旅衣下揺るもさ

蹴踏ひけくは陰子干船さく女

吟行

茶湯之花見顔けふ雀ふ

水白く廿年を経く故人下あふ

今二ツ中下活るは梅さ

伊豆乃園軽く小島此葉のくお念去まの秋よりゆ御

いさやうに種まゝくらん草花
けいふ家名をききてまのたの及つまふりて尾張のふ
ちうとをいひまゝくらん草花

いさやうに種まゝくらん草花

此僧とまゝ生きて回園寺大願和尚とむ月のお
は化しつゝやまのこもせらるゝにすら道より
ま角の方へやまゝくらん草

梅意く卯のふねむ洞之那

贈杜園子

白々に羽とく蝶のこゝろ

二及相葉をたかひにまて今や東ふらんよふ

牡丹葉菊のくふやう増は余花

甲斐乃玉山家平あちりく

初約のまより慰むやういれ

卯月のま糸の房をかこむ懐のつゝいそ

夏こほむいそ風をさかす

鹿嶋紀行

おきくち乃乃繪くおきく利休く糸くねくくそれ貫道
きく物く一かき志く風雅ふおきふれ生花の志
くひく四時友をきくもたふあふはくは
おきく月くあきく事きく像花のくは
夷杖く心くあきく時をく歎く
杖をく歎く造化のく造化の
きく物

神を月が初を定めけりく一身を風葉落
糸ききん地く

旅人くあきくねん初く
又山系花を宿く

山城の住者を神とくは招を付く其角亭に
おきく開送くをく

けきみくのをく旅乃つ

け角く落沾公より下く世傳くをく
神く一回友親跡門人會あきく詩舞又まは
訪ひ或る糸鞋乃料を包く志をく月之糧を
けく力を入る紙衣糸子かきく帽を

やれ物公く下送りはしひるあおるれは苦さるふ
ふくは争あはれ小艇さう久別野下はうあー
あ庵下酒肴携りまうく初集を脱一石舟を
おみかきさうこそ控へあ家人忠首途さういふ
まうとく物免うくさう控えれ
柞道乃日記といふものき紀氏長明阿佛乃尼忠
文をぬひ情を盡しとより解と皆付似とひと
糟粕を段ふ中つらつた中く浅智短才は筆下
及くもあはれさうらるる信意なり晴くそくに松りり

かたに何ふ川流さうなりと事なれくもいふく
まはるもさうも其文種新乃まきひふらさうの中
うまはれ山さうさうあはれ風景心まはり山館聖亭
乃とくもた結も早さうあはれ此種となり風をれ候り
あはれあひひかきさうあはれあはれ路や先やと書は結
其程酔も者の怪漢さういふもいふ人忠渡さう
事さういふもいふさういふ人忠さういふ

あはれあはれさういふ

あはれあはれさういふ

飛鳥井 雅章公此篇より海路の遠くなる
見よと云ふを海を中よる事と云ふは
此を以て海を中よる事と云ふは
此を以て海を中よる事と云ふは

京まゝくもまゝくもまゝくもまゝくも

之川の國保を以て云ふは杜若の志の
心と云ふは越人の消息と云ふは
尋ぐりてと云ふは吉田と云ふは

まゝくも二人揺れる船と云ふは

あまの繩を田乃申と云ふは海を以て
吹上る風と云ふは

不かり

まゝくもやゝるまゝくも氷の教は師

保良村より伊豆古崎へ一里半もまゝくも
つれなく伊勢と云ふ海を以てと云ふは
つれなく伊勢と云ふ海を以てと云ふは
つれなく伊勢と云ふ海を以てと云ふは
つれなく伊勢と云ふ海を以てと云ふは
つれなく伊勢と云ふ海を以てと云ふは
つれなく伊勢と云ふ海を以てと云ふは
つれなく伊勢と云ふ海を以てと云ふは
つれなく伊勢と云ふ海を以てと云ふは
つれなく伊勢と云ふ海を以てと云ふは

ぬる里や掛乃結平一信也一の事

ちのの〜一信結平あお〜さんと酒の〜物あ〜と〜之日
カ結平あお〜と〜

二日もしぬる〜と〜れと乃ま

初春

ま〜と〜ま〜と〜九り結野山形

結まやや〜り〜ふ〜一〜二寸

伊賀の國に彼の石のふ所は後桑上人乃回經あり
護持山新大佛寺とや云名もつり〜を〜果の形と

り〜〜伽藍を破〜〜礎を結〜坊今を結〜田畑と
名のか〜〜丈六れも像ハ昔乃羅〜埋て佛〜一の〜現
然とあれ〜を結〜ふ〜上人乃結〜影をい〜と〜の〜お
〜〜〜一〜結〜を〜と〜代乃名結〜と〜ふ〜西〜ぬ〜洞〜を〜
〜〜り〜之石乃甚〜甚掛子乃石乃〜ハ蓬津結上〜
〜〜〜堆く双林の枯〜〜結〜意中結〜ある〜に〜と〜と〜ら〜れ〜事〜

丈〜〜〜〜か〜〜〜ふ〜〜一〜石結上

故主禪吟公乃遊〜

さ〜ゆ〜純事お〜い〜世を極〜

伊勢山田

何の木も花も志くは白く形
裸くもまことなまはるる花の風

菩提山

け山の空一は昔よ母光あり

新尚舎

物乃名張すのふ若乃わの葉の

細代民部雪堂會

梅の木に枝やるともや梅の風

茶菴會

茶梅の門を津乃わの葉の

神垣のうちに梅一本もなりいふ故も事くや神司
かゝに尋侍まこと事くはなかりおのつる梅一
まくこ子良の館乃後下一の侍もくはなかり心

神子良子法一の侍もくはなかり梅の風

神垣やおひもかきき 深葉係

流生まるとは程そはなまことまこと花の我をな
枝折とかくそ若野の花に思ひまんとまこと

つゝこ崎まゝ契り車一人乃伊勢よと出むひた
に縁舟のりしおれももえんはらふあふまき子とけり
と道乃使へしもあんとまのうろ万菊丸と君さふふ
味なりつらふ名おさまる具ありつらふひは
ぬふりしゆきんとまのつらふり海まき

乾坤無位同行二人

よー聖少の櫻んきふ枝様本堂

吉野よりくふもんせふと捨本さき万菊丸

松の奥まふらるのさくくからく物も捨たれも夜忠

料ま紙衣一ツ合物やうの物現等紙茶号三三
さんとけり包く後より有るはいつくとも弱く
力ぬき身もぬきゆきひくやうに道たす
た物たすゆき

羊外く宿くはや後乃花

初瀬

喜れ花や蘇り人申の堂の隅

足詰く傳もんくう花のる万葉

善城山

あつた月はあつたさへかへしはせり梅よこらへ
あつた梅の枝はあつたさへかへしはせり梅よこらへ
かろ貞室のさへかへしはせり梅よこらへ
あつた梅の枝はあつたさへかへしはせり梅よこらへ
かろ貞室のさへかへしはせり梅よこらへ

さき

父母乃語り、こゝろ維子のこゝろ

あつた梅よこらへ、あつた梅乃院 万葉

和歌

新巻、わが此浦まゝ追分とて

紀三井寺

あつた梅よこらへ、あつた梅乃院
あつた梅よこらへ、あつた梅乃院
あつた梅よこらへ、あつた梅乃院
あつた梅よこらへ、あつた梅乃院
あつた梅よこらへ、あつた梅乃院
あつた梅よこらへ、あつた梅乃院
あつた梅よこらへ、あつた梅乃院
あつた梅よこらへ、あつた梅乃院
あつた梅よこらへ、あつた梅乃院
あつた梅よこらへ、あつた梅乃院

のこまきい能者とせん草鞋乃わく足りまう一はを
おんと年まいたくおひの時を動を辨一日に情成
あつじや一日のふ風雅なる人の中命をふまひ
かぶらね一日はきさあしくかきあつて思を推
く程の人も遠ざれるし思ふかたわひいさあぬむ
くおうちになくおむしとぬく瓦石れうらり玉と
指ひ涙中に金をゆき心地を動かす書し人
中もかこんと思ふうまきは揺志一ツねのう

右更

一ツぬいく後千願ぬおえ
吉野あて布子帯さし衣うえ 万葉
灌佛の目とあふまをさうし指ゆふ麻は子紙
を産をんくけりおわくおしきねを

灌佛れ早生まのよ麻のよ

招提寺鑑真和尚来朝の時舟中七十餘夜乃難を
志の起あひ四目のうち塔風吹入るゆ終年四目盲を
終ふる像をねし

わつ葉しは目乃常ぬくハ

高友よまふらふそわのふ

床乃角す山一節乃りて地味

大坂よと盛人あふらふらふ

枯らぬらふらふと後乃一乃地

浪磨

月よあけて浦に花も散るは乃

月よあけて浦に花も散るは乃

卯月中は花も散るは乃
月よあけて浦に花も散るは乃
月よあけて浦に花も散るは乃
月よあけて浦に花も散るは乃

啼出つてを東市に海の花も散るは乃
おほはらふらふと後乃一乃地
おほはらふらふと後乃一乃地
おほはらふらふと後乃一乃地

海士乃歌

東浦一海士乃歌
おほはらふらふと後乃一乃地
おほはらふらふと後乃一乃地
おほはらふらふと後乃一乃地
おほはらふらふと後乃一乃地

海士乃ち... 古戦場の... 羊腸険阻... 道中... 息

道中... 行旅... 道中師乃ち...

道中... 乃ち... 乃ち... 乃ち...

明石夜泊

明石夜泊... 壺... 乃ち... 乃ち... 乃ち...

陰陽あり却り人かたむと世を風情のしるき
少も物色はるきふ思ひもよきぬ身へ入る精魂玉
厄乃乞ちきと世とありてやま

あけ申す一高松のまへ一若の月
棧やい乃ち城のまをきかつ
棧やまの思ひいつるむく
芳晴る棧々同もぬきぬき 越人
姨於山を八幡ふ里より一里づり南は西南より横
をきく冷しきく丸のまかしく丸の岩まきく

もきあられ物身はのすこからきありのし
きんもあつるたにわくそ海平出くた何あり
若き人を持しんと思ふくゆも流きひしを

仲や姨ひやくたしく月乃友
いさよひもまはるけれ那々
きらあやとよき純月見中ゆ家 越人
ひよろくく程露々や女の花
身あきく大根くく 秋風
木雪の揺るま世の人若きをるふ

乃調ふふあはれやかくも薫婦のふくしきけはふ
ととれむくはれとてはぬくけくろく志く一目か
種は成時かまはれとあふ老翁の出まへとあつ
とすは言すも後と書れ、剣を搦ふか
とつて一君をぬきむ望人をあきと石田をぬき
む望人をぬき一まて人の心をぬきとてはぬく
すも目は一のむく夕顔の陰り、牡丹がら乃誓
をまへ縁ひくく佛のまへとてはぬくあはれぬく
とてはぬくまへとてはぬく力よその剣をたぬく

多き文王乃始り仕をまへに事たのむや、今様を
むつて一たおれぬにうはりは聲も唱音も古代の
まへに一は校定さるるまへと一はぬく一はぬか
ちとわあ、うはれまはれおつてはや

雲井乃瀆

洛乃素門雲井自は像もあはれ、あはれ方、
ぬくむもあはれは、あはれ画くはぬく、
後、あはれ、あはれ

いつれの人かたはしるくはしる人のまよふもあはれ
の載乃もはらう今もたはれはきみはのこちある時を
まよふもあはれしるくはしる人のまよふもあはれ

もよほしやまよふもあはれしるくはしる人のまよふもあはれ

西行上人の賀

まよふもあはれしるくはしる人のまよふもあはれ

まよふもあはれしるくはしる人のまよふもあはれ

雨居の箴

あはれもあはれしるくはしる人のまよふもあはれ
まよふもあはれしるくはしる人のまよふもあはれ
あはれもあはれしるくはしる人のまよふもあはれ
あはれもあはれしるくはしる人のまよふもあはれ

心々の海庵乃戸を―あきく世とかなめさしき
魚はくくくききききききききききききききききき
の
あや

酒のめさしきききききききききききききききき

自得の蔵

きききききききききききききききききききききき
のきききき

目出度人結数しんんんんんんんんんんんんんんんん

机乃銘

間が秋時と村をきききききききききききききききき
かふききききききききききききききききききききき
乃精神をさくきききききききききききききききき
あの方寸入ききききききききききききききききき
あききききききききききききききききききききき
ニツ卦を彫みきききききききききききききききき

とてはあまのこゝろ一用をたてておこし二用をせしや

座右の銘

人乃經を以事せしこと長を少くせし中ねれ

銘に曰

物いへば居させし秋の風

東順の傳

老人東順も横氏として其祖父江列望田の農士竹氏
と稱し横氏とてその晋子も母方小も其子も其子も
十午歳幼少を其秋を月をやり舟枕の上小海あり花
る其情露を少くめか思ひかより其床のけしとまて
神も其心は終りて史料の白紙かみりて大業
妙典の基に居るわらうし時醫をまひく恒のま
と一牛多何某乃公と里俸跡をゆきか金魚甌
塵乃愁すれしはまても世路をいひく名は乃

衣を穿きて杖を折く業をすて既なり一平道はたしめ
けり市店は山居かかく樂むと云ふ事とて家た次
札をさしめ申す自あまう其事申す事とて車より
こぼれり湖より一平道より東野に終りて
是の所より大隈朝市に人なる一

入月北流を机書曰陽の南

古戰場浅吊ぬ乃文

之代乃榮耀一睦乃中申し大門乃流を
一里こぬふらと秀衡、流を田野よりけりて
金鷄山の形を跡をすの高館よりけりて
南部よりけりて大川より和泉の城をめ
とるこころ彼の下に大川より入る康衡等
旧路を夜々開き隔て南部口をさしめあま
ぬをくるといふこと相念義長すとの事此城
よりあまの功名一時の最とけり國形より山
のりり城春めくるといふ事とて筆打し

時ははらばらしく霞を渡りけり努力

其ふたむ兵ももつる者の法

嵐蘭乃誄

金革を禱中へあへてものまらふ士の志也文質
偏さしけりふとりの君ふれいさをもしとに松倉嵐草ら
義を忠告めり實は傷め老壯を魂よかきく
風程を肺肝のりりあそいさせりとちなむいさ

十とせあまると九とせをわけると歩をりくと官を辯へく
山石個年先賢の跡をたふふとくも老母をたひ
移りてはほくくくくく世はよもふはははは
榮辱はらりり居りて見ぬ風をいへり今年
仲の坂中の三日由井金津の波乃乾り月をそふ
くく謙倉り杖を束ねのかつらと重んじ地がやま
くくくくくく息縁ぬ回き廿七具は花の事
ふや七十乃母よ生るも七葉は稚子よ思ひをばす
いさしきむむむむむむむ十道にふもつらふはるま

暇をききしめし悔もたうつらぬくをのけは秋
風も吹きほほしく草の枝うらやまきこも口せし
とあつき身今に時乃心さく——さうもあつきたに
若母の恨も——のちもまたさ——をからさるんづ
とくくをさし——親接の別心——さつと月
さつりに稚子——さうもあつ——予——さうもあつ——かき
よきほきさききう——はふ王戎もあつ眼は—
うふ——と戎の一字を摘く嵐戎と名つく其の
ほつる色今目おあつさうもあつ——さうもあつ——

あつにからてそ人——さうもあつ——あつて父乃めく
さうもあつ——さうもあつ——足乃めくさうもあつ
むつひは伴乃愁の枝——むきほれと抱さうもあつ
めつさうもあつ——さうもあつ——思ひものくむさうもあつ
さうもあつ——さうもあつ——抱さうもあつ——さうもあつ
さうもあつ——さうもあつ——さうもあつ——

秋風——折るか所——さうもあつ

こは後部乃事よりこの二冊者多帯を
をらふ未読るん世よぬ甚意翁乃文集より
けりし讀年そはそ一巻賦よりそりそ誦
をらふ中そく二十九篇り後そ一乃文選の例
をらふそく載きまそに社翁の文集と作
これ道乃好むれま意がそ一志のそりそ部
の人乃言一ゆ事れかそらんそ城おひそり
彫子中便をつくのひてけ文集を梓らりそ

しるしゆく部部の友の友人とをわの物とけ道母
ねふの夏かさをねふしうるや

瓶お福園み市店のお

蝶酔

江戸

山寄 金兵衛

井筒屋庄兵衛

楊屋治多清

合抄

蕉門俳諧書林



善如の甘明之書お祝おし
午引て後りのる

